

グローバルイシューを考える

－ゴミ資源化への必要性和緊急性－

張 偉 (チョウ イ)

首都大学東京人文科学研究科日本語教育学博士前期課程 (中国)

1. はじめに

「ゴミは置く場所を間違った資源だ」と言われているが、正にそのとおりだと思う。誰にも遠ざけられがちなゴミは、うまく取り扱われれば、資源並みの価値を発揮することもありえる。一口にゴミと言っても、ゴミの中に多くの種類もある。筆者の住んでいる東京都の多摩市¹を例にしたら、ゴミが概ね燃やせるゴミ、燃やせないゴミ、プラスチック・粗大ゴミ、有害性ゴミ、びん・かん・ペットボトル、新聞・古布などのジャンルに分けられている。それぞれのジャンルに、また、どのようなゴミが燃やせる系に属するのか、どのようなゴミが燃やせない系に属するのかなど、と詳細な下位分類も設置されている。地域によってゴミの分け方が少し違ったりすることもあるが、ゴミを分別し、回収して再利用する理念はどこにおいても同じなのである。回収されたゴミはどこに行くのかというと、言うまでもなく、再利用・資源化への道に入るのである。全てのゴミがリサイクルの道に入れるわけではないものの、一つ一つのゴミと相応する処理法が実施されている。

日本などの先進国において、ゴミの回収・リサイクルの理念といい、ゴミの運搬・収集のインフラの整備といい、すでに非常に成熟になっている。しかしながら、視線を世界中の国々に投じたら、日本のようにゴミをいちいち回収し、再生して利用する国が多くあるわけではない、という事実も見える。特に発展途上国にて、経済発展にかまけて、ゴミの収集はおろか、環境保護の意識さえ薄いのである。それは非常に甚大な課題である。だが、逆に考えれば、もし多くの発展途上国においてもゴミはきちんと回収されて再利用すれば、これも中堅な力になれば、世界の環境保護に多大で且つ有益な影響を及ぼすに相違ない。そこで、より多くの人にゴミ資源化の重要性を知ってもらうのは本文の動機付けとなる。これからはごみ資源化の必要性和緊迫性を述べていく。

1 多摩市ゴミ・資源収集カレンダー<http://www.city.tama.lg.jp/0000006529.html>

2. ゴミ資源化への必要性—自然との平衡を求めため

周知のように地球上の資源（石油、天然ガス、鉱石、石炭、森林、漁業等）は無尽蔵でなく、極めて限定されている。石油資源にせよ天然ガス資源にせよ、如何なる資源であろうとも、使う度にその量が減少するわけである。そこで、私たちは自分の消耗した分を補充せねばならぬ。もし補充しなければ、いつか必ず使いきりになって枯渇してしまうと想像しやすかろう。要するに、利用すると同時に、補充することも考えねばならぬ。利用と補充とのバランスを維持し、自然との平衡を求めてこそ私たちの生活が成り立っていくのではなかろうか。

では、如何に補充して自然との平衡を求めようか。その答えは、利用した資源をゴミで補充するのだ、ということである。

ゴミと資源との関係をまず正確に把握してゆこう。ゴミの前身は資源である。多摩市でのごみの分別法を取り上げよう。多摩市の燃やせるゴミであるプラスチック類が石油を原料として作られたものである。燃やせないゴミの金属類などが鉱石から鉄やアルミを精錬して生産されたのである。古本、雑誌などが森林の恵みであろう。要するに、ゴミの基は資源である。どうして「ゴミ」はゴミになったのかというと、ただ私たち人間の生活のある面での役に立たなくなったのでゴミと扱われてしまうだけである。もしも、生活のこの面での役に立たなければ、生活の他の面での役に立つ可能性があるか否かを確認さえすればいいということになる。必ずゴミは生活のどこかの面での役に立つのである。ゴミは、その役に立つ面を探せたら、要するに、その価値を見つけられたら資源と一変する。資源とゴミの関係を図示すると以下になる。

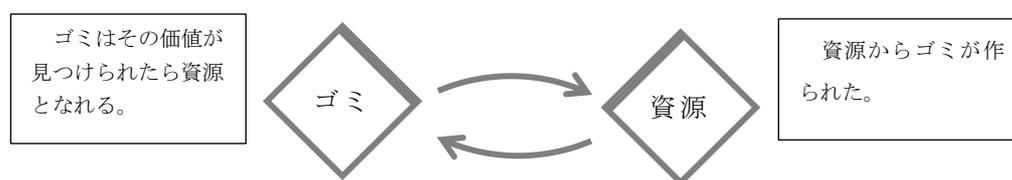


図1 資源とゴミとの関係図

補充することはゴミの価値を探し出すことに負うところが大きい。ところが、ゴミの価値を探し出すのも決して容易ではない。それは色々な要因（技術、社会、問題発見力等）に左右されているからである。幸いなことに、一部のゴミは価値がすでに発見できてリサ

イクルされている。多摩市でのプラスチックを原材料としたリサイクル方法²を紹介すると図2になる。

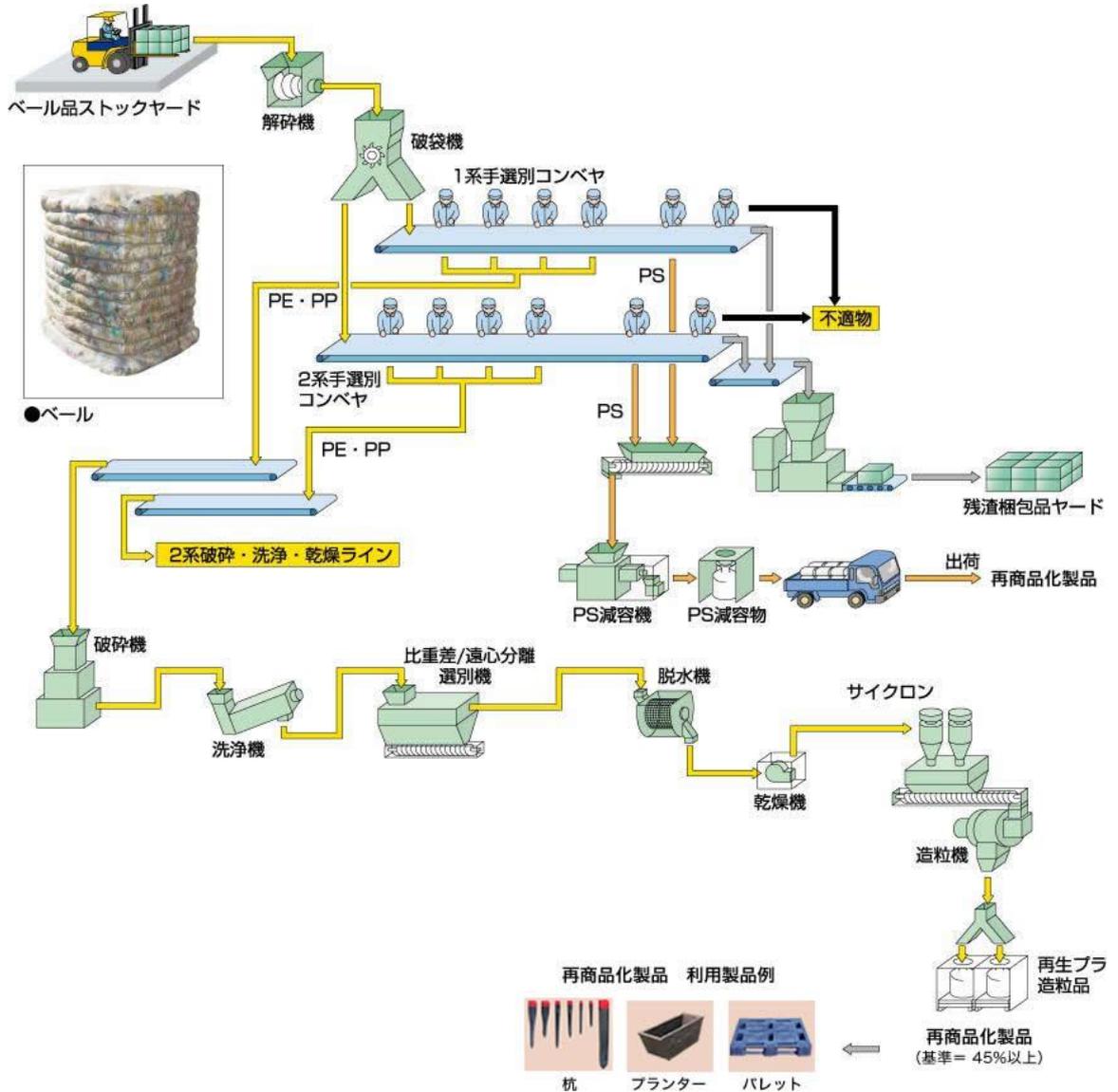


図2 プラスチック材料リサイクルの流れの例

ゴミの価値の発見は難関ではあるが、人間社会が絶えず発展するにつれて、技術生産力も向上し、将来更なるゴミの価値が見いだされることは期待されている。

2 <http://www.jppra.or.jp/recycle/recycling/tabid/430/index.php>

3. ゴミ資源化への緊急性—プラスチックゴミがすでに生物の食物連鎖に

ゴミはそのまま放置されると、空気や土壌、河川・海を汚すのである。図3は2017年北西太平洋で観測された海面浮遊汚染物質（プラスチック類）の分布である。

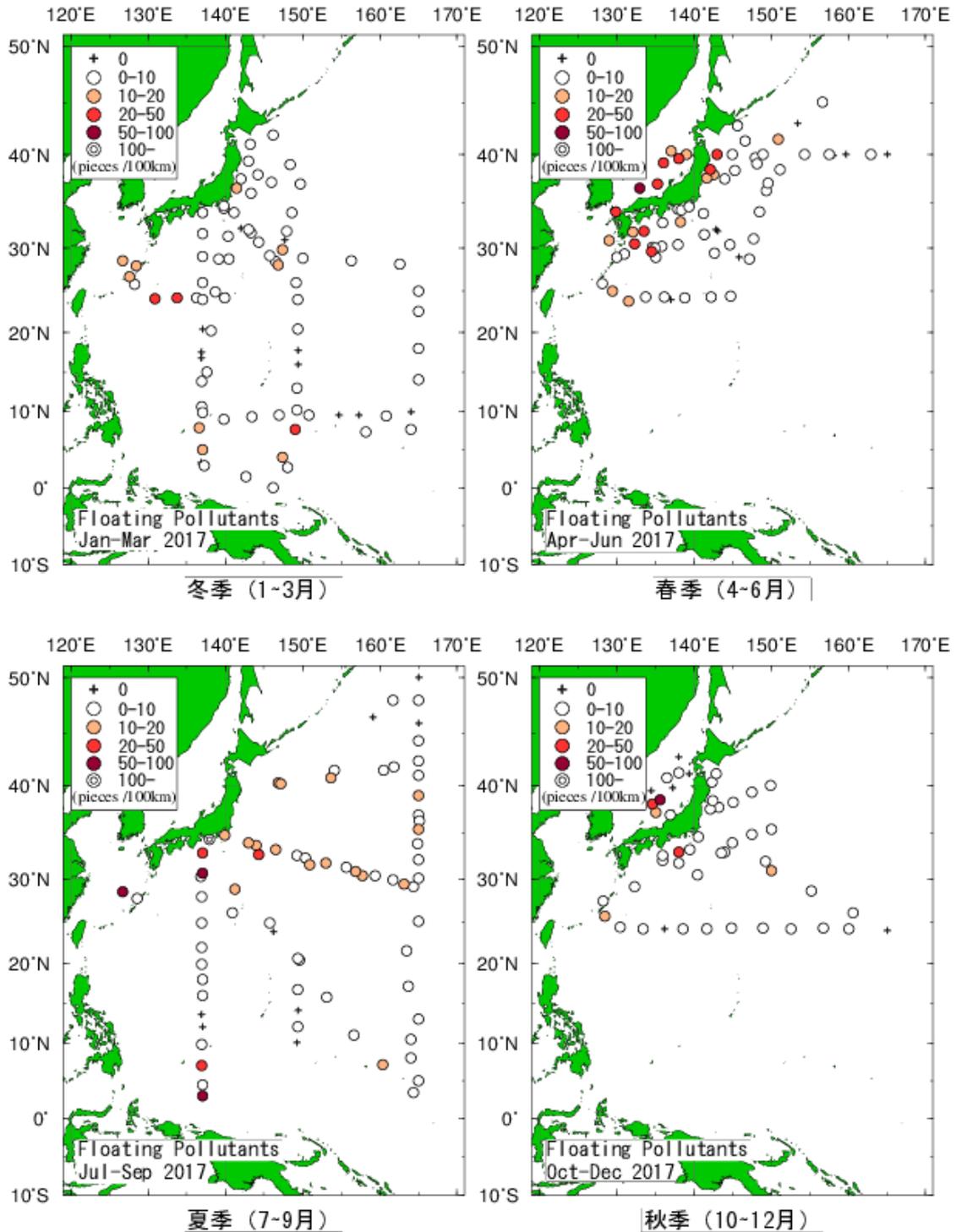


図3 海面浮遊汚染物質（プラスチック類）の分布³

3 http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/pollution/archive/d_1/floatpol/result_flp.html

海面浮遊汚染物質（プラスチック類）がかなり広範囲にわたって分布している。これが海洋生物の生息環境に脅威を与えるのも想像に難くない。プラスチックゴミを食物だと思って食べたクジラが苦しんで死んでしまったり、プラスチックゴミに体を絡みつけられたまま海亀が自由に動けなくなったりするニュースは何回も聞いたことがある。今年の、世界を感動させた、母親シャチが死んだ子シャチを 17 日間運び続けた記事⁴は改めて人々の関心を海洋生物の棲息環境に寄せた。子シャチの死にプラスチックゴミとの関連があるか否かははっきりとは判定できないが、海洋環境は日々プラスチックゴミに飲み込まれ、ますます状況が深刻になりつつあるのも確かなことである。また、プラスチックゴミは日当たりや浸蝕作用によってマイクロプラスチックに変身しかねない。マイクロプラスチックは食物に混じったりしてしまうと私たちの体内に入り込む恐れがある。東京農工大学の高田秀重（ひでしげ）教授らのグループがカタクチイワシの消化管からマイクロプラスチックを見つけたという記事⁵もあるし、それに、英ハル大学などの研究者グループが、ムール貝から小さなプラスチックゴミを発見したという記事もある。そのまま放任すると、遅かれ早かれ私たちの体内にも「プラゴミ」の姿が現れかねない。今年日本に上陸した台風 21 号「飛燕」、及びフィリピンと中国の南部地方に上陸した台風 22 号「山竹」が当地に大きな爪痕を残したのはいまだに覚えている。台風による海水侵入で、農地・家屋などが冠水したことが多発した。浸水が退いたら、以前勝手に海に投げ捨てられた各種のゴミが水と共に下がらずに現地に残って散らばっていた。それは大自然の「恩の返し」というか、私たちが大自然に及ぼした悪影響はいつか必ず大自然にそのまま返されるのではなからうか。自然との「和」を求めることの大切さは改めて感じられた。

4. ゴミ資源化への提案

ゴミ資源化の進行に拍車をかけようとして、筆者なりの考えを 2 点述べてみたい。

① ゴミ資源化に関する宣伝・教育を普及させること。

宣伝・教育によって、人々にゴミ資源化への意識を培ってもらおう。学校教育や、家庭教育、社会教育（公共講座、チラシ宣伝等）を通し、ゴミ資源化への意識を高めよう。

4 参照記事 <https://www.bbc.com/japanese/45165832>

5 参照記事 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/57140>

②世界各国による連携を深めること。

自然との平衡を保つのは一国の力だけではなかなか足りず、世界国々の力が不可欠である。自然との平衡を保つ方法の大きな一環としたゴミ資源化は、世界各国による情報共有や経験交換が必要である。

5. まとめ

私たちは地球に住んで、地球で暮らしてきたが、言うまでもなく、これからも続けて地球で生活を送っていく。そこで、地球を大切に守らないわけにはいかなく、地球上の資源を粗末にしてはいけない。よく地球を「地球村」と言われてきたが、国家・人種・信仰などを一切問わず、実は私たちはみんなこの村に住んでいる「村民」である。村をきれいに守ったり、健全な村を作り上げたりするのは私たち「村民」の責任ではなかろうか。「村民」一同、ゴミ資源化のスローガンを掲げて清潔・持続な村づくりに合わせた力を注ぎ込んでゆこう。

参考文献

- 1 国土交通省 気象庁

http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/pollution/archive/d_1/floatpol/result_flp.html

- 2 私の町のリサイクル

<http://www.jcptra.or.jp/Portals/0/resource/special/mytown/index.php>